

2024年7月28日前晩  
年間第17主日  
菊地功大司教 メッセージ

ヨハネ福音は、「五つのパンと二匹の魚」の物語を記しています。

ひとりの少年がささげたのは、五つのパンと二匹の魚でしたが、そこに集まった五千人を超える人たちの空腹を満たしたという、奇跡物語です。

この物語は、少ない食べ物が多くの人を満たしたと言う奇跡の物語であると同時に、自分が持つ数少ないものをまもるのではなく、他者のために惜しみなく分かち合ったときに生まれる愛の絆の物語でもあります。

教皇フランシスコは2015年7月26日のお告げの祈りの際にこの福音の箇所に触れ、次のように述べておられます。

「イエスは『買う』という論理の代わりに「与える」という別の論理を用いています」

その上で教皇は、この物語が、ミサを通じて主の食卓にあずかり、主イエスご自身の現存である御聖体によって生かされることで教会共同体にもたらされる、共同体の交わりにおける霊的な一致の意味をあらためて考えさせると指摘します。

教皇はそのことを、「ミサにあずかることは、イエスの論理、すなわち無償の論理、分かち合いの論理に分け入ることを意味します。また、わたしたちは皆、貧しいからこそ、何かを与えることができます。「交わる」ことは、自分自身や自分が持っているものを分かち合えるようにしてくださる恵みを、キリストから受けることを意味するのです」と記します。

さらに教皇は、わたしたち一人ひとりを「与える」ことへと招かれて、こう述べています。

「わたしたちは確かに、一定の時間や何らかの才能、技能を持っています。『五つのパンと二匹の魚』を持っていない人などいるのでしょうか。わたしたちは皆、それらを手に入れています。もし、わたしたちが主の御手にそれらをゆだねたいと望むなら、世界が少しでも愛、平和、正義、そしてとりわけ喜びに満たされるのに、それらは十分、役立つでしょう」

世界は希望を必要としています。とりわけ、各地で頻発し、なおかつ解決の道が見いだせない武力による対立は、多くのいのちを危機に陥れ、絶望を生み出しています。世界は希望を必要としています。

希望は、どこからか持ってこられるような類いのものではなく、心の中から生み出されるものです。心の中から希望を生み出すための触媒は、共同体における交わりです。互いに支え合い、ともに歩むことによって生まれる交わりです。少ない中からも、互いに自らが持っているものを分かち合おうとする心こそは、交わりの共同体の中に希望を生み出す力となります。